

良之女也、后兄右大臣藤原朝臣基經初夢、后露臥庭中、苦腹脹滿、頃之腹潰、氣昇屬天、即便成日、其後  
后以選入掖庭、遂有身。

〔榮花物語浦々の別〕

五

かの承香殿の女御うみのつきもすぎ給て、いとあやしくをとなければ、よろ  
づにせさせ給へとおぼしあまりて、六月ばかりにうづまさにまいりて、御修法薬師經の不斷經  
などよませさせ給、よろづにせさせ給て七日もすぎぬれば、又のべて萬にいのらせ給へばにや、  
御けしきありてくるしうせさせ給へば、殿まづ心なく覺しさはぎてまつ内に、右近の内侍のも  
とに、御消息つかはしなどせさせ給へば、御まへにそうしなどして、いかにくなど御つかひ參  
り、女院よりいかにくとおぼつかなくなどきこえさせ給ふに、この御てらのうちにては、いと  
ふびんなる事にてこそあらめ、さりとて里にいでさせ給はんも、いとうしろめたき事など、この  
寺の別當なども申給ふ程に、たゞごととなりぬべき御けしきなれば、さはれつみは後に申おもは  
んとおぼして、まかせたてまつり給ふほどに、たゞ物もおぼえぬ水のみ、さとながれいづれば、  
いとあやしうよつかぬことに、人々みたてまつり思へど、さりともあるやうあらんとのみさは  
がせたまふに、水つきもせずいできて、御腹たゞまゐれにまゐれて、れいの人はらよりも、むげ  
にならせ給ぬ、こゝらの月比のちのけはひだにいてこで、水のかざりにて御はらのへりぬれば、  
てらの僧どもあさましよういひ思ち、おとゞはなぬかやむと云らんやうに、あさましよういみじ  
きに、かひきなといふことをせさせ給て、そらをあふぎて、ゆめさめたらん心ちしてゐさせ給へ  
り。

〔言繼卿記〕天文十九年五月三日丁卯、一昨夕、右大將殿

○足利晴

於坂本穴太被薨云々、但慥無注進、從

舊冬水腫脹滿也、

〔漫遊雜記上〕鼓脹多得之於天盖受體之初胎穢結爲癰潛在腹裏、壯年後、勞動心志、修養失其宜、則因